

平成 26 年度（2014）第一回 GBIF 日本ノード運営委員会議事録

2014 年 11 月 19 日 福田

日時：平成 26 年 11 月 12 日（水） 13:00－15:00

場所：コンベンションルーム AP 秋葉原 1 階 O+P 室

出席者：伊藤、大久保、大澤、大原、高久（中山氏代理）、多田内、藤倉、星、三橋、山崎（剛）、細矢、松浦、山崎（由）の各委員

オブザーバー：

岸本 圭子 東京大学大学院 総合文化研究科・研究員

桐原 崇 環境省自然環境局 生物多様性センター 生物多様性センター調査科・主任技術専門員

美和 秀胤 環境省自然環境局 生物多様性センター 生物多様性センター調査科・主任技術専門員

戸津 久美子 国立環境研究所 生物・生態系環境研究センター・高度技能専門員

渡辺 恭平 神奈川県立生命の星・地球博物館 学芸部・学芸員

神保 宇嗣 国立科学博物館 動物研究部 陸上無脊椎動物研究グループ・研究員

中江 雅典 国立科学博物館 動物研究部 脊椎動物研究グループ・研究員

海老原 淳 国立科学博物館 植物研究部 陸上植物研究グループ・研究員

福田 知子 国立科学博物館 植物研究部・支援研究員

欠席者：中山（代理として環境省自然環境局 生物多様性センター主任技術専門員 高久宏佑氏）、小池、柴崎、城石、山野の各委員

NBRP： 小島 美智代 NBRP 事務局員

事務局： 熊野 有祐 国立科学博物館 研究推進管理課

開会あいさつ、欠席委員からの委任状確認により、会議の成立確認。

【1】各機関の活動報告

国立科学博物館（細矢）

NPO法人西日本自然史系博物館ネットワークと共同で研究会（6/2）を開催した。

1. S-Net の資料件数は約 362 万件である。
2. 標本の全国コレクションデータ・データベースを JBIF ポータルに掲載した。
3. 研究員・学芸員データベースの登録数は 465 名である。
4. 九州地方 S-Net 説明会（10/27、於九州大学総合博物館）、GBIF の生物多様性情報指針（GBIO）の翻訳版の作成（11 月末完成予定）、JBIF パンフレット改訂、S-Net パンフレット準備など、各種広報活動を行っている。

<質疑>

- ① S-Net の IPT2 への連携にあたって S-Net を改変する必要があるか？

- データはそのまま使用、メタデータは IPT2 の項目に合わせて現在の項目を振り分けることで対応する。
- ② S-Net のプロモーションと、用途適合性を促進する方策をどう考えているか？
 - データ提供館に、「提供したデータが提供した側にとっても使える」ことを気付かせる必要がある（チェックリスト作成、自館の資料の評価など）。その後、用途適合性を上げる方向へとシフトしていきたい。
 - S-Net の利用をコンテストなどを通じて促進するのはどうか。コンテストは一般へのアピールとして良い。賞金は無くても良いし、スポンサーを募集する方法もある。JST でもデータベースを利用したコンテストを行い、一般へのアピールに効果が得られた。
 - S-Net 展示キットをつくって博物館を巡回させるのはどうか？
- ③ 緯度経度情報の取り扱いと収集をどう進めるか？
 - 緯度経度情報のみを（地名なしでも）収集して緯度経度情報を集めることについては、緯度経度の正しさと精度を表示する点が問題。
 - 市民活動で緯度経度を示す機器を使う機会がふえており、それらの情報取り込みを考える必要がある。
 - 測地系不明の古いデータの処理については、GBIF では特に決まりがなく、誤差を含む、と表記するしかない。
- ④ 大学コレクションからのデータの取り込みを進める必要があるのではないか？
 - 東大・京大など、かつての古い標本を持っている大学コレクションのリソースを提供してもらうための戦略が必要。
 - ワークショップを開くなどして、大学の人と標本コレクションのデータベース化について話すべきである。

東京大学（伊藤）

1. 第 21 回 GBIF 理事国会議・執行委員会（9/15-19）に出席、COP12 の AP-BON サイドイベント・AP-BON ワークショップ（10/9-12）に参加し、生物多様性情報の国際標準化等につき議論を行った。
2. 昆虫・ハエ目の日本産種約 1000 種の種名チェックリストを作成した。
3. 生物分布情報（観察・観測データ）の収集・電子化（文献情報、南三陸ネイチャーセンター準備室の観察データ）。
4. DNA バーコードシステム関連の講演を行った。

国立遺伝学研究所（山崎由）

1. サーバマシンおよびポータルサイトを運用している。
2. 国際 GBIF のニュースレターの和訳および e-book を継続公開した。
3. GBIF へのデータ登録（2014 年 10 月に 3 館計 45,155 件のデータを公開した）。

4. バーコードオブライフデータを用いた生物種同定システムのデータを更新した。

ワーキンググループ（細矢）

1. JBIF- GBIF 事務局の会合を行い、事務局と日本ノードの情報交換を行った。
2. GBIF アジア地域会合を行った（2014.7.17-18.科博、つくば地区）
3. アジア地域絶滅危惧種・侵略的外来種リスト統合に向けて作業中である。
4. GB21（2014.9.15-17.インド）の GBIF 理事会に参加した。
5. S-Net 説明会（2014.10.27. 九州大学総合博物館）を開催した。
6. JBIF パンフレット改訂・出版
7. GBIO 改訳版の出版について（11 月末に出版予定）
8. 関連団体・プロジェクト等との交流
9. ポータルサイト運営
10. IPT2 のインストール状況
11. 日本種名目録作成に向けて
 - ① GBIF への拠出金の計算根拠変更による各種変更について
 - MOU の切り替えは手間を省くため廃止または、必要に応じて修正。再度のサインは不要となった。準参加国は 5 年で正式参加国への切り替えを決めることも必須ではなくなった。また準参加国も、拠出金が支払えれば正式参加国に戻れる。
 - GBIF 予算は運転に必要な中核（コア）事業と用途明細が出るその他事業に分けられるが、日本は約 2000 万円を後者に拠出し、ステータスを準参加国に書き換え中である。
 - ② GBIF が出版するデータセットに DOI をつける方針になった。これにより、データセットの特定・追跡が可能になる。
 - ③ GBIF データのライセンスはどうなっているか？
 - 各データのライセンスはメタデータに書き込まれており、CC0 でなくても許諾を得れば利用は可能であるが、利用の際、1つ1つライセンス条件を調べるのが大変なので GBIF としては一括して CC0 で扱いたい意向。現在調整中。
 - ④ GBIF の地図画像を自由に使えば一般に対して GBIF のアピールになるのでは？
 - GBIF の地図画像については、一般に引用できる体制をつくるよう GBIF に依頼する必要がある。

【2】各機関の活動計画

国立科学博物館（細矢）

1. 恒例の研究会・ワークショップを行い、自然史標本情報の意義と利用について発信する。
2. サイエンスミュージアム・ネット（S-Net）のデータ拡充を引き続き行う。
3. 標本のコレクションデータ・データベースを引き続き作成する。

4. 研究員・学芸員データベースの充実をはかる。
5. 各地での説明会、GBIFの生物多様性情報指針（GBIO）の翻訳版を配布など、データ提供を促進するための広報活動を行う。

東京大学（伊藤）

1. 種名チェックリストを作成する。
2. 生物分布情報（観察・観測データ）の収集・電子化を進める。
3. DNA バーコード情報の収集を行う。

国立遺伝学研究所（山崎由）

1. サーバマシンおよびポータルサイトの安定運用を継続する。
2. 国際GBIFサイトのリニューアル版に対応したチュートリアルを作成する。
3. 国際GBIFのニュースレターの和訳およびe-bookを継続公開する。
4. GBIFへのデータ登録を行う（国立環境研究所の藻類保存株、NBRPリソースなど）。
5. GBIF日本ノードのデータ統合を目指す。
6. 和名辞書の更新を行う。
7. バーコードオブライフデータを用いた生物種同定システムのデータを更新する。

ワーキンググループ（細矢）

1. 標本のコレクションデータ・データベースの中でも特に重要なタイプ標本について、保存成するに当たって、まず30館を目処に重要コレクションのタイプ標本の明細・連絡先の整理を行う。

<質疑>

- ① タイプ標本連絡先データベースをどのように作るか？
- タイプ標本の所在だけでなく博物館・担当学芸員情報も含めて公開できるとよい。
 - ワーキンググループの課題としてまず30館ぐらいいを目処に着手する。

【3】その他情報

- OBIS-GBIF間のデータシェアが止まっていたが、OBIS-GBIF本部間で契約ができそうなので、間もなくデータシェアが再開されると思われる。

以上